
死神様は僕です

かなりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神様は僕です

【Nコード】

N2674M

【作者名】

かなりあ

【あらすじ】

この公園が僕の未来を変えるなんて僕でさえも予想していなかった・・・

謎の公園

第一章 謎の公園

ある日の午後僕はある公園にきた。

まだ誰も言ったことのないといわれるあの公園に・・・

そう、この公園のことを知ったのは学校の帰り道・・・

赤い服を着て、きれいな黒い髪をした女の人と・・・

「このことは誰にも言ってはいけない・・・言ったら全てがなくなってしまう・・・」

このときの僕は何を考えたか、急に女の人が言ってた公園に行きたくなった・・・

よくよく考えたら、言ったら全てがなくなることをしてながら僕にいったんだろ？

疑問がありながらも、その女の人のおとについて行った・・・

そして、その公園に行った時には僕はもうこの世にはいない人になっていたことにも気づかなかった・・・

「あなたはこの公園が見える？」

急に質問をされた。

一瞬とまどつたが確かに見える。

だけどはつきりとじゃない・・・うつすらとしか見えない。

「うつすらとなら・・・」

「そう・・・」

この後、長い間沈黙が続いた・・・女の人に色々問いかけてはみたものの、

何の返事もない・・・

そして急に女の人とはまった。

「？」

「ここからは一人で行きなさい。」

女の人はその言葉を言ってから消えた・・・

「えっ？ちょっとまっててください！」

この公園にきた意味はなんなのかよく分かってないのに・・・

急に行きなさいといわれても・・・

どこに行けばいいのやら・・・

結果的に、

「とにかく歩こう！」

そうだ、あてもなく歩いてたらどこかにたどり着くだろう。

でも僕は運がないのかよく分からないが、

また変な人にあってしまった・・・

「試験合格だ」

「な・・・なんの!？」

次にあった人は、ショートカットの女の人だった・・・

急に、試験合格だつて言われても意味が分からない・・・

しかもなぜみんな赤い服を着てるんだ？

まゝそれより・・・

「どこどこですか？」

「教えられない・・・今教えられるのはわたしたちは人間ではないこ

とだけだ・・・」

帽子で顔が見えないが、なんとなくは表情が読み取れる。

さっきの人と比べたら結構年を取っているのかな？

「次の試験は、会場で行う付いて来い・・・」

そしてまた無言の中・・・あるて、中でおんなおひとがこういった・・・

「わたしは、そんなにふけて見えるか？」

「なんのことですか？」

「さっき、話してた時にさっきの人と比べたら・・・考えただろ」

今までとは違う、女の子らしい声に少し驚いたがそっちよりも・・・

「なんでわかったんですか？」

「質問に答えろ」

僕の時には言わなかったくせに自分の時には言えか・・・

なんか、なつとくいかないな・・・

ここは正直に言ったほうがいいのかな？

それとも女心を傷つけないように・・・

しかたないここは・・・

「お・・・思いました!!」

なんかめっちゃくちゃでかいこえでいったけど・・・

どんな反応したかな・・・

そして、上を向いた瞬間！

「そうなんだ・・・そうなんだ・・・」

女の人はいらみながら

鎌をもちだして僕の横に落とした！

ドスン！

「うわわわわああああ！！！」

それからこのやり取りを何回したあと女の方は落ち着いたのか。

「それでは行きましょうか」

何事もなかったかのように歩き始めた・・・

試験会場

第二章 試験会場

「あの～まだつかないんですか？」

「・・・」

たく・・・あれから何時間歩いたと思ってる？

未だにこの試験の内容とか知らないのに・・・

「着いた。」

「こ・・・ここって!!」

そう、目の前にあったでかい建物は今まで普通に見ていた建物・・・

それどころか、俺が死ぬ前にいたところだ・・・

「それじゃ・・・」

「待つて！」

「なんだ？試験のこと以外聞くことは違反だぞ」

女は、めんどくさそうにつぶやいた。

だがそれよりも気になる・・・

「何でここが試験会場なんですか？」

「・・・特別に教えてやる」

「ありがとうございます」

「おまえが見ているものは私にも分からない・・・ただそこに見える建物があるの一番思いが

強いところだと思います・・・」

思いが強い？俺は・・・俺はこんなところに思い出なんて・・・

いじめられ・・・

罪を擦り付けられ・・・

あれ？その後が思い出せない・・・

「・・・まだか」

「えっ？なんかいいましたか？」

確かになんか言ったように聞こえたんだが・・・気のせいかな？

「早く入れ」

「は．．．はい．．．」

気まずいふいんきの中試験会場で見つけたものは！！

「な．．．なんだよ．．．」

そこにあつたのは、昔僕をいじめていた子たちだった．．．

「どうした？ なにかみえるのか？」

「ア．．．あそこに．．．ああそこ．．．」

もう言葉になつてない．．．なにかもがおかしく見える．．．

左を向いても右を向いても死体ばかり．．．

ドクン．．．

ドクン．．．

「やめろおおおおお！！！！」

「！？なんだ？」

僕はこのとき隣においてあった包丁をぶんぶん投げていた・・・

どこに当たるかも分からず・・・

ただ何もなかったかのように・・・

「こんなことするために俺を連れてきたのか！！！」

「ち・・・違う！そんなこ・・・」

バタンツ・・・

「おい！！しっかりしろ！おい！」

それから僕は、ある夢を見た・・・

自分の未来

第3章 自分の未来

「なんだここ？」

真っ白い空間・・・

自分はそこにいた・・・

だが懐かしい気もする・・・

「なんだこのボタン？」

やっぱりこうゆう物を見てしまうと誰でも押したくはなるだろう・・・

・

だがこのときだけ・・・

なぜか押さなかった・・・

いや・・・

押せなかったんだ・・・

押したらまたへんなことがおこるとおもったから・・・

押したらまた変な空間に行くかもしれないから・・・

「あれ？押さないんだ？」

「！！！」

「前の君なら押すけど今の君は少し賢くなっただんだね？」

なんだ？前の君？

人間には前世というのがあったと聞いたが・・・
そのことなのか？

「押したら？」

「何なんだよ！！いきなりあらわれては押すとか賢いだとか・・・
！！」

「・・・バーカ」

小さい声で言った・・・

「なんなんだよ！！」

「とにかくこの空間から出たいならそのボタン押せ。」

「はあああ？さっきはバカとか言ってたのになんなんだよ？」

もう意味が分からない・・・

ただでさえ頭が混乱してるというのに・・・
急に現れたやつにいろんなこといわれなきゃいけないんだ？

「つたく・・・世話かけませんよ・・・」

ドンッ！！

「・・・んな!？」

倒れた弾みでボタンを押してしまった・・・

「これで未来の自分とけちやくつけて来い・・・そうしない限りおまえの苦しみは消えない」

「うああああああああああああああああ!!!!」

予想が当たったといえいいのかまた変な空間に出た・・・
次は真つ暗な部屋だった・・・

「あら?ご客人とは・・・まためずらしいことも・・・」

次は執事的な人だった・・・
この人だったら分かってくれるかもしれない・・・

「あの・・・急に質問してわるいんですがここは?」

「はい・・・ここはあなた様の未来のお部屋でございます」

み・・・未来?

その後僕はこの不思議な人に何もかもをしゃべっていた・・・

「そうですね・・・いろいろあったのですね・・・」

なんか嬉しいような悲しいような・・・

今までの中で分かってくれた人があまりいなかったため理解された

ことが嬉しい・・・。

なかなか話もしてくれなかったからこんなに話ができ気分がすっきりした・・・。

「それではご案内いたします」

「えっ？ど・・・どこに？」

「それは未来の自分とですよ・・・自分のお心がすっかりされていないと扉は開きませんから・・・」

なんだか納得せざるを得ない説明力だ・・・
今まで生きた中でこんなにもすっかりした人は始めて見た・・・

「とびらに入られた後は時間制限がございます・・・」

「どれくらい？」

「約1時間程度でございます・・・」

一時間・・・

そ間にくは何をしなきゃいけないのかと考えていた・・・
けど何も思いつかなかった・・・
あいさつはしとこう！

「おもしろいですね・・・挨拶とはいいことですがね」
クスクス笑いながらも話は続けてくれた。

「後は自分がうまれてから何をしてたなどとかは、はなさないで下さい」

「えっ？」

「次に生まれた時に変な記憶を持って生まれますとこちらの責任になりますんで・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2674m/>

死神様は僕です

2010年10月17日12時21分発行